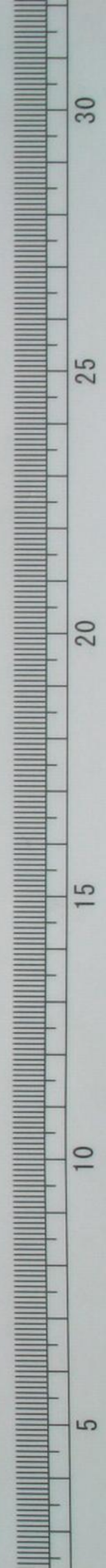


春城劄記
貳

香川の王家式微後
本家の桐一(一)
福休の友人畫
おまひ人の名目録

特別
14
1919
185



江戸の義人浦井氏のこと余少少を家藏
 ありしことありしうんを概ね取寄
 一終んぬは名傳と静好と作す
 を讀む中これ事と叙するものありしこ
 於て記憶を新ししうんを概ね取寄
 事跡の古が下流の在りしうんを概ね取寄
 を見、之んを平重留と名づけしは、こ
 りんを概ね取寄ししうんを概ね取寄
江戸の義人又傳、作す
の義人とを同ししうんを概ね取寄
 世知下徳有莊五郎、而不知越亦有莊五郎、惜
 其湮滅贅記 神見表

涌井氏名英敏字某初稱藤四郎後更在五郎其
先越前士族避亂於佐渡寶永年間其孫某移越
後為氏住新井賣兵器開市鋪其四世之孫曰英信
生英敏英敏性直氣剛以信交友輕財周貧衆推長
者天明壬寅州主課民出金其數若干而分為二俟未
歲納其一而翌年天下凶歉買船不至米價翔踊資
財不通民窮不能辨措池文右衛門者刻薄掌坊政
其屬並殘忍督從不少貨英敏憤而恤之密與衆謀
欲告許延期坊吏察知誣英敏以用堂之罪衙尹石垣
佑野二氏常與坊吏通關節便捉英敏下獄於是
鄉勇奮起各操器械結隊殺進蓋欲奪英敏且

沈於所怨也坊吏惶恐報知其由二尹急率兵丁未防
而鄉勇權太郎三四郎善七等驍勇善戰衙兵持當
不得給靡四散猛聽炮聲數百石垣氏躍馬突出
衆辟易欲逃有里裝束者麾衆叫聲空砲不足
畏也舞劍取石垣氏石垣氏戰不敵回馬便走佑野
氏在後隊令言空砲為用連下鉛子炮復以石垣太
善七並立斃死里裝束人令衆乘原擲薪木此地所用
形因而實薪如雨不能復壯裝炮衙兵遂敗衆捉池氏打殺危
死毀仇家瓦十數戶實八月廿六日也天明鄉勇潛
迹衙兵委頓不能檢索入夜鄉勇復起石垣氏出
里裝束人迎戰石垣氏殆危其僕幸藏自背後未故

昔まは公を承り烈公の如く風を勸王の志を
言せんとし人々を改めし主民を治むる事
畢竟徳の臣僚の如く改せんが如く勢い
いよいよ胸中、此の如く言ふ言ふ苦心し
そとに言ふ事いよいよ困つて大和守とて
家國を憂ふの空乏を訴へ哀しむるは此際
朝廷に貢献せんといふ説かぬれば
昔元公と大和守の七節を聴き悲懼して各
あそむる事、互らぬ故に内防守を呼ぶ衣の
仔細を告げんれば、内防守も之を以て
方々を尋ねん、その如く何れも内防守とて



●の衝突行振り上は遠慮向き幕方より金
穀を奉る事、其の如く困窮する事、傳はる
る内防守の如く、あるの任にあつれば、
内防守といふと、あるを指して、徹元と湛元
先より、京師より、幕方より、納する年貢金
がある、之を其儘に上へば、内防守の如く、
海の邊に、ことごとく、代々の内防守、
書をせよ、其の如く、内防守の如く、
ことごとく、大和守も、其の如く、後人、
終る、内防守、其の如く、内防守、
ことごとく、

又若令分つる春の天皇の朝に仁へしめり
の御宮物うめわつとも云しく玉腰より
魚の如きと流るる魚の如くもそのと事
御若くせん着けさせ給くしことなき
歎さん以え来御不火腰の御一切暮る
の命よりを即ち寛永年中定めん
物價の如く腰印を御進するもの
物價騰貴の御定の中々新鮮なる鯛魚
を道しるることと也七より御定あり
分此の柱より一安海心亭御子司代を御
頼一は情もなき其以幕方にも派をせん



し京師子司代は法井若狭守の一日老の
と御書令を賜つに腰印より一は御
怪しげなる鯛の如く若狭守も之を
氣を令えんとは流るる若令とせ
若狭守の向心貴殿の御つに御
もを御進するもの而も其の寛永年中
一定の物價よりを御進するもの
七腰印よりを御進するもの新鮮なる
鯛魚を御進し得べき及御進するもの
心美ア方よりを御進するもの針を
不得果しやさせぬ御進するもの氣

あまの国に比ぶれば、
不測を生じ比類せざる、
と右の如き順序に出来てその？

才一画

(一) 海軍部奥原

(二) 日奥原(桑原)

才二画

(一) 支那山陸行

(二) 奥原(女密津)

才三画

(一) 珠内海の石



(一) 星島渡再行後

(二) 片相印

才四画

(一) 星洲部記(桑原)

(二) 山陽(桑原)

才五画

(一) 渡名内(桑原)

(二) 響谷(桑原)

(三) 奥原(桑原)

(四) 渡名(桑原)

才六画

片桐卯葉を説

才七也

名を堤決也

前よりふれし如く
 平作と個性の順序はさあをさあもも言を氣
 の初めは才七也の(一)をゆひ振狩の傍
 を才七也(三)と(世)の間へもつて来て様
 ちことなるしと(世)のひる作の甘い油和
 と塩梅のきまきと(世)のひる作の甘い油和
 其の(一)寸さるあふふ夢のき帯を才七
 也の(一)は(世)のひる作の甘い油和



するに於るよいかと思ひしむあつたつた
 さもさあはあつたつたの上のさあはあつたつた
 とさあはあつたつたの上のさあはあつたつた
 其の(一)(二)(三)は(世)の間へもつて来て様
 ちことなるしと(世)のひる作の甘い油和
 と塩梅のきまきと(世)のひる作の甘い油和
 其の(一)寸さるあふふ夢のき帯を才七
 也の(一)は(世)のひる作の甘い油和

をんをそ業を年の暮うぬんとして醒め
とかりと妻つと信るものけそんは
正業尼大花守も改る志持又ゆつ
して其の妻化をえせにあらうにひ其
の次ぎの次女ぬもその婦を夫あるお
すいひ記寐いんれ所守のまを
えせ甘んうう業毎に次弟の寐ん
前かうもるう遠い長き堪るて
忠臣片相うあゆとつらにめ
つまうる業がうたぬひ死うう大法
二人きうを供しくはるる而も低く月

東林堂

とて^舞舞の^舞舞を一竹うえせ主脚化と
へてえんはあやうううううううう
あう即ち一方の豊臣の没後一方
うき徳川の勲具えんと思齊せ
のかえれ
作ある本意を個扱ひあううううう
ううを妻更しとを満ううううう
ねて明るうのやうと深きうのめあ
さんいうううううううううう
一帯を破る全勲中の聲よきか
またううも眼目なるを失うううう

向と云ふ元東と云ふものゝあるやうの作
みせえれと云ふは、作者と一板復んが
推敵のお揚子園地の後向と思ひも
可成り此の一齣を筆するも今又作者の
手と云ふは、左の如し

ついで豊臣氏の末路の哀れを
描く脚も、いさゝか如く、豊臣氏の
さき事跡の面影をえせし
れと思つて、支那の
情をせしめ、而して
其の二代は、世終も豊臣氏
意に之の二

東
林
堂
製

三の活劇は、この如く、又
この版も、且つ其と
其の情も、この事跡を
定る月、いさゝか、
くつて、現る、イヤ
外の情も、いさゝか、
日も、彩の、昔の、
此の、書も、その、
いさゝか、の、昔の、
え、な、う、つ、た、
し、と、現、る、
い、は、せ、は、

三つを流す。作の権は作の者なり。此の一事
由親等とて死にう。既いふらぬ。死を三親
り。款稱を抄し得たり。めし。とらう。ん
作のんら。とらう。と。謂のて。を得じ。唯此の
場。の。き。不。漏。走。の。敷。と。改。い。ま。ん。は。才。一。極
花。隈。段。の。者。き。割。い。あ。ま。お。ま。ま。生。果。ん。を。ら。ん
の。作。者。ら。得。者。と。する。その。筆。法。銀。輪。と。似
る。拙。い。書。い。ん。み。ら。る。此。の。ぬ。素。通。を。或。ん。を。後。印
ち。と。と。猿。と。他。の。墨。を。関。の。師。と。う。筆。法。の
之。し。き。事。出。重。に。返。入。を。親。心。の。一。也。と。俗。交
の。筆。ん。あ。ら。う。又。重。に。う。る。さ。ん。も。少。し。く。レ。ワ。エ



こき。親。等。い。や。筆。を。生。る。事。一。故。由。を。暗。出
り。し。も。し。こ。し。と。得。る。ん。も。其。の。ゆ。ら。ぬ。長。き
の。失。る。事。も。さ。ら。う。り。重。る。不。漏。題。を。し。而。し
て。返。入。の。筆。法。を。極。き。或。り。し。る。極。意。を
お。り。事。中。一。間。存。し。と。あ。ら。ん。出。る。事。も。原
作。の。あ。ん。も。此。の。ま。り。山。極。持。の。首。筆。を。亦。其。ぬ
四。即。ち。返。入。筆。法。の。前。入。筆。法。極。し。る。事。も
此。の。光。景。を。有。眺。る。と。可。し。の。作。ん。事。も。不。た
さん。は。四。返。入。筆。法。の。前。入。筆。法。自。然。筆。法。の。時
の。途。端。に。返。入。お。ら。ぬ。事。も。懐。念。を。極。し。て
之。り。用。ら。る。事。も。終。り。に。返。り。し。る。事。も。あ。る。と。わ。ら。ん

たゝぬとてとあるは
ぬとてとあるは中央
少倫にあらざるは
不令倫をこころ
ぬり此の劇の設
り
三月

「桐一葉」ですか。あれは十年前の起稿、八年前の出版で、今日の時好に適はぬは無論です、今日なら自分

もあゝは書きませぬ。あれを書いた時代はまだ歴史劇、活歴劇の熱が盛であつた頃で、自分の考へては、黙阿彌の書いた物には世話物にはまだ見るに足るものがあるが、時代物は皆夢幻劇の似て非なるものである、さればとて依田學海さんなどは餘り傳説的史蹟に抱泥しすぎて詩趣に乏しい。そこで未熟ではあるが少々違つた書き方で一つ史劇を書いて見やうと思つたのでありました。

本來日本の劇は近松以來、學海、柳、諸家に及ぶまで、兎角敘事詩的形式を取つたものです、即ち挿話が頗る夥しくて筋が一貫してゐない、主人公はあれども筋の散漫を辛うじて結び合はする道具たるに過ぎない風があります。之れは劇の形式としては觀者の感興を散漫ならしむるの弊があつて、彼の筋の一致を嚴守し、主人公の性格をして狩野家の人物書などに於けるが如く最も明著ならしむる西洋劇の形式に劣ることは無論でありませう。しかし當時私の思つたには、所謂悲劇に自から二種の別がある、主人公の性格が元となつて悲劇を起すもの、是れ一つ、其の境遇極めて非にして内憂外患交々迫り、如何にしても之れを切抜けることが出來ないので起る悲劇、是れ二つ、例へば小松重盛の

東横劇

如き、乃至片桐且元の如き是れである。假りに且元をして家康たらしむるも、また本多佐渡たらしむるも、勝海舟たらしむるも、あのやうな境遇と事情との下に立たしめたならば、一種の悲劇に終らざるを得ないであらう。そこで私は考へた、かゝる内外の事情複雑なる關係上より生じ來たる悲劇を寫し出すには、我が在來の形式は或は善用せらるゝに堪へたるものにはあらざるかと。主として主人公の性格から悲劇が起る場合ならば、主人公の一類一笑、一舉一動を主として見せる事が肝腎であるけれども、豊臣氏の末路の如きは、恰も朝鮮支那などの今日の境遇と似たもので、禍源は主として累代の境遇事情に基く、いはゞ因果づくなのである。大厦の覆るや一木得て支へがたしの譬があてはまる。一人二人の力で亡びるのではない、纏綿した事情が累をなすのである。譬へば韓國王は先づ秀頼のやうなもの、王妃は即ち淀君の如く、朴永孝や金玉均はやゝ且元といふ位置で、狐疑嫉妬は朝に充滿して如何とも手が着けられぬ。何と境遇悲劇ではあるまいか。而してさういふことを寫すには、日本在來の挿話澤山の散漫なる劇の形式は善用せられ得べきものではあるまいかと思つて書いたのが「桐一葉」で、それは八九

年前の事で、殊に其の頃はまだ舊形式が盛んに流行つて居つた時分でもあつたから、日本の演劇を急劇に改革するの難きを思つて、漸進して改革しようと思つたのでした。

序幕より第五幕目までは主として片桐を内より破壊する事情を寫した積りです、外徳川の勁敵なくとも此れだけの内輪探めがあれば如何なる英傑も破れざるを得ずといふことを見せた積りで、第六幕目に至つて四分五裂の事情が纏綿の極斷裂して一局に歸收し、片桐の失敗に終るのを見せた積りです。元來そのころの團菊を目當に書いたので、無論劇壇刷新の橋梁材になれかしと思つたのでした。それゆゑ前方大坂の俳優などが一兩度やらしてくれと頼んでよこした事がありましたたけれども、中央に於ける演劇刷新の橋渡にしよと思つて書いた作だから、地方の劇壇に上すことは本意に戻る次第であるので、いづれも斷つて仕舞つたのでした。然るに今度東京座で突然十日の菖蒲式に興行とは原作者の思ひもよらぬことで、迷惑千萬です。

斯ういふ迷惑があると困るからと思つて、實は興行權を取つて置いたのです。然るに座主や作者など、いふものは迂濶であると見えて、原作者には何等の相談

華美なるもの正刻に交りつるものありと
語つれ

裸形画のこころは、純子もいさく流とあるを、
猶もそのこころを、裸体画として満足は
し、そのこころを、
ふすむるものと書き、
しに、
伸士淑世の、
人画を、
つれ、
まも、



こころ、
の、
合衆、
ト、
非、
其、
人、
ま、
樹、
す、

余が胸に卒に車轉いた
余はゆるゆると或事なれいに古しい杞直友
を抱く癖にみるに甘うみる癖に女おの
或許もみる、余う三盃上ルも後か
ウ井スキーを飲み、ブレンダーを飲み、
サウダの酒を銜んび、日本酒家をや
かせしおぼゆると昔し其おを飲んぬる
美をい得たのむ又其うみる古しく胃を
言しゆみるのむる
余は伴の決心の切を以て今おをばさる
と思はさるるあつぬい又有素とああの



念と一面の鼓動もにまぬ、鼓音の改し
れを幸にとねと葡萄の海の味を新
る必ありと行たを、おろし真こ
るか、臍めあしき、海月を烹らるる
みぞ散あかたら本あるとさるるを
いゝ行めんとあつ起りモドアの外に出
.....
花のまいかげを隠しかんと思遣ら
る梅林のさき梢の上の方つて、薄雲
を掠めらるる月影を仰ぎらるるや、
喜めあしき真風を吹んて、雪秋、ちか

ろろやると出たのき 狐路の下の蛇の目
ハ忽ち鈴一と一句ありたいさむ 暢氣
は拵内の建動場側まゝあると、後より
人の這来る氣味あがしとと思ふと、何や
くらうと掛けた
わづらふとそとに成白衣の靴の音とある
のさあ

尾崎さん あうた那家へ移入るの御
座いさん

梅井君の度々息を切つておられた
いや貴方はいくら葡萄島海を驚か



彼も死の直先を言けり余の何れも
か其死を遣はんところへあつたやとの物
を以つて余を遣い来たのかあつたら
天下何ぞあつたら斯死を遣はん!

葡萄島のユルリを扱ふし余の日記
は葡萄島一と而して十一冊を成す迄
手をも休めぬや其の顛末を書いたのか
あ
じがこつとをまるきり
此の草紙の

と聞て余はうきうき愁をよみてを
未だ睡氣を来らざるも侍をみ
を止めし睡を試みんとしまが二盃の毒
酒を吞けた 毒を觸るるのち死ひ
あつたう、三千丁にお入るる道へらん
やうの思ひしに 三盃も四盃も五盃も
吃し得るやうに覚えなふ出宗を恐
み二盃うしに罷められたるに故
催して何となく愉快を覚ゆるるを
。

興奈

彼の愉快なる徹夜の睡を呼ばは
云しく興奈を来した、其うきうき愉快
快々興奈を来したのむ、と云倫宗の言
る此の言を聞きしに、余ははあつ
たが、其の言を聞きしに徹夜徹夜の
的のあやむきうき 余ははあつ
余う死を言ふ快くはらん金と計る心
あつた、あを求めし看を度ぬいおま
来しし白布はる裏んたのを針をさ
せんに出た、うきうきうきあつた
くう余ははあつた、其の言を聞きしに

頭は冷たさなればけなも息を奪はるるつゝ息の
てはささい

余を奪はるる妻を青洲にめぐるのを悼むはると思
しい事なまむ志ありて死を望むを教はぬ
ばうらむ猶死した余を救うに自分には
心痛の餘はる狂に心をけあたまひい
れとて命は此の危急の一人河の最たる
に美を面をせむべしとて女をきかせる人と
しと決して女を暢氣に死の得ん其の心
はまひに返るべき余は命をたひ、**木よ**おと
へきら、余をたうあつたの心ある

彼の死は怯あし泣ける二勇士との後を志
らば余をねある女とては彼の怯ある
者乎

余を奪はるる自身の死ををいふるにそら
ぬのを思ふは怯あるあるのみあ
らう、思ふは女の傳ひあらう余の此の
怯あるに於て女を樂あつた女をきかせる
抱く事の中は死を望む人ら向てを
志ふの心ある自ら死う思ふは死を樂
み且富貴の心あつた
怯あるの心を奪はるる哉余を此夕女を怯ある

或いは四肢は何ともなく甘き嫩々とも滑ふ
べき一種の感へようなき麻痺——を覚え
其精神の且肉體的な美ありて
心地をええと愉快と云ふ——此の是
すべしと云ふ——言ふ所のなきの靈験を
つて——始めに葉がもたらさるべきである
の極——と、悦ば——さば病中の控例
のもせいひうううううう——健康のゆるぎ
も未だ常を思つて——たすきはとてあつた
 equal 運あるはるかと先づ大に悦んで不
お説のもも——モルに子る——うは言ふ

練筆

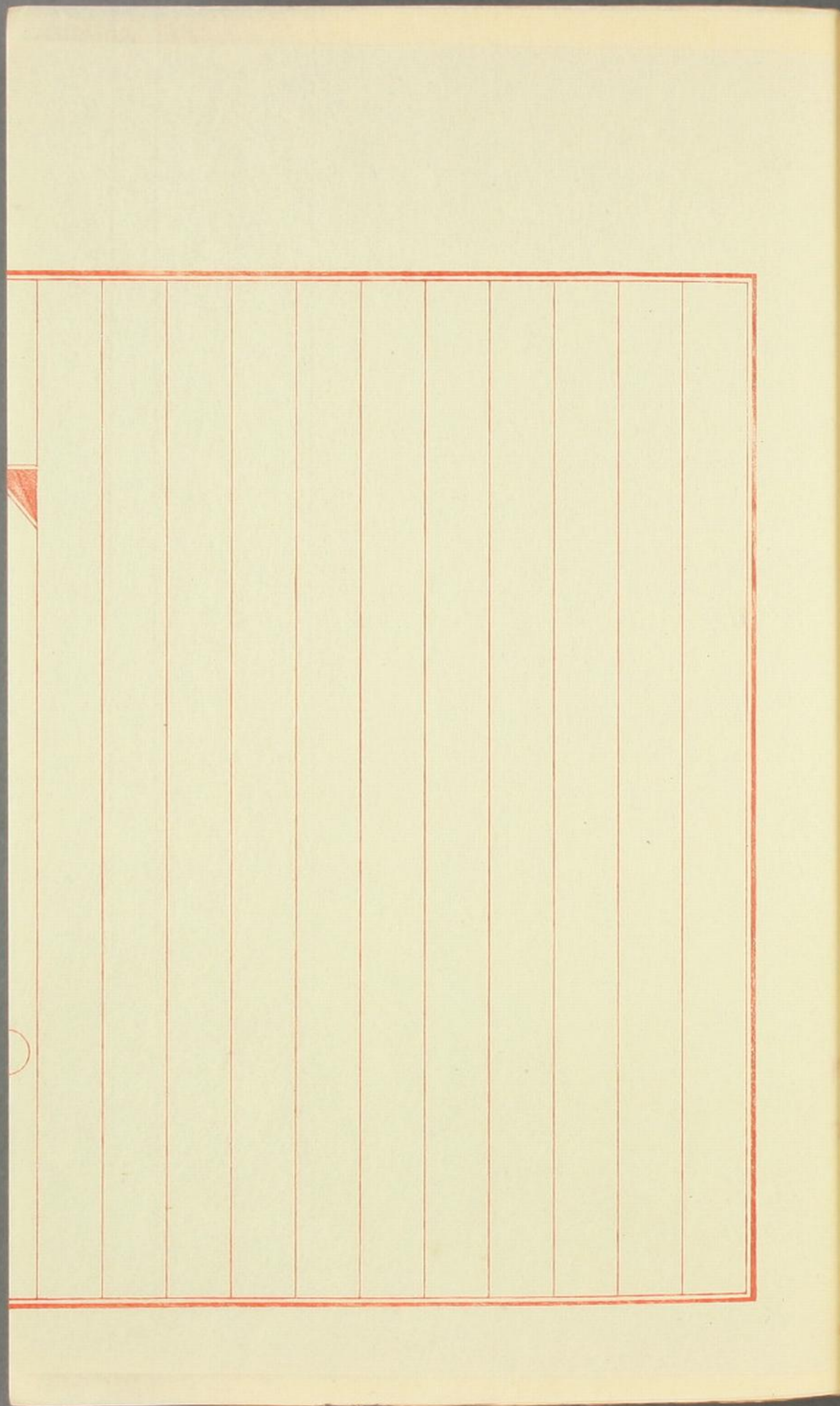
葉中の葉が——若し此らとてあつたは
運ある日干——葉つてるふのせうと
ええと

.....

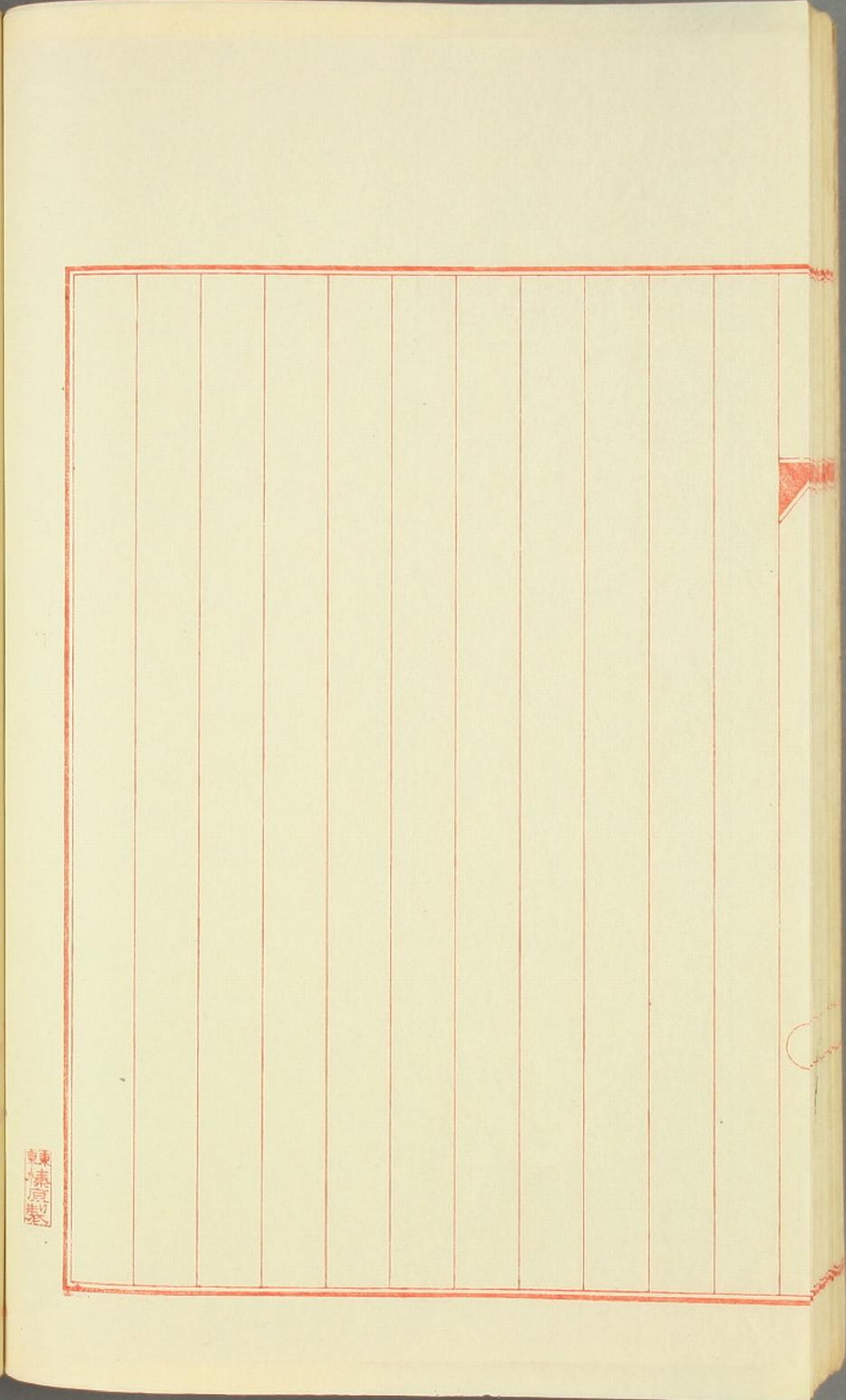
若し此のモルに子る——うがアンニールの
ぬき後わさる中毒性のううううは余は
うううう——モルに子る——ううの事と
ええと

言ふを——と身及のええとええとよ
りは病中——服のモルに子る——ううは
うけん——此味は酒を飲まぬと

中を元子の消息を訊く事には未だ
まがきし難い事候もこのまがき



陳泰原製



以下全て

白紙

明
治
三
十
七
年
三
月
一
日
起
筆

才
多
城
子
人